

くり密植栽培における間伐予定樹の処理法

くりの初期収量を上げる密植栽培では、間伐予定樹の下枝をせん除し、上部の枝のみを残す処理（縮伐）により、間伐までの収量の低下を防止できる。また、密植栽培で多発する実たんそ病の発生も少なかった。

農業研究センター球磨農業研究所(担当者：藤丸 治)

研究のねらい

くりの密植栽培は初期収量を上げるのに有効な手段であるが、樹齢が進むと過密状態になりやすくなるため、収量を落とさずに間伐予定樹を処理する方法を検討し、くり密植栽培における効率的な間伐を図る。

研究の成果

- 1 収穫穂数および全収穫量は、密植区が最も多く、次いで縮伐区、間伐区となった。
- 2 健全果率は、縮伐区、間伐区とも70%以上であったが、密植区では実たんそ病果実の割合が多く、健全果率は56.4%と低くなった。
- 3 健全果収量は、縮伐区は密植区と同程度となり、間伐区では縮伐区、密植区の約半分程度の収量になった。

以上のことから、間伐予定樹の下枝をせん除する処理により、間伐に伴う減収を少なくし、実たんそ病の発生も抑えることができる。

普及上の留意点

- 1 「筑波」での密植栽培（96本/10a程度）では、実たんそ病の発生を防ぐため、樹冠が隣接樹と交差し始める4～5年生から間伐予定樹の下枝せん除処理（縮伐）をする必要がある。

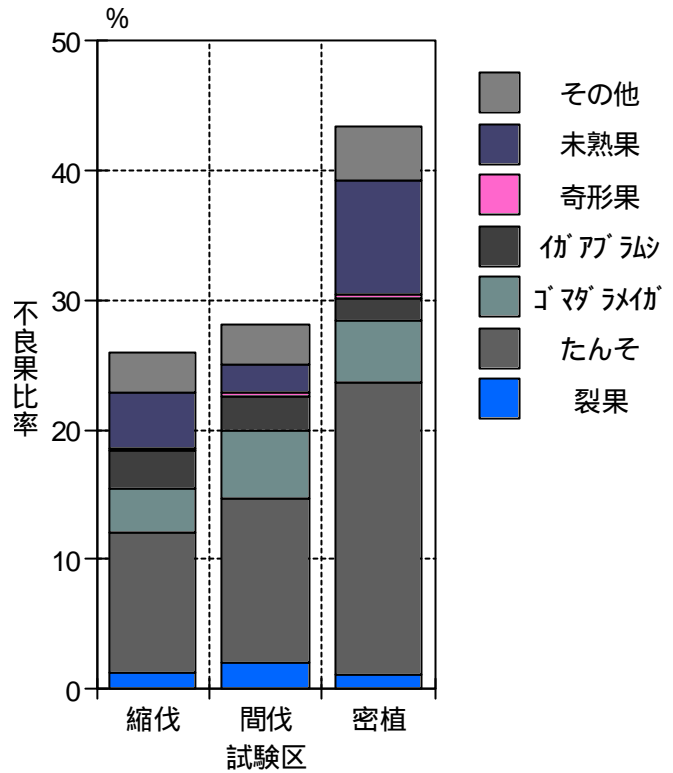
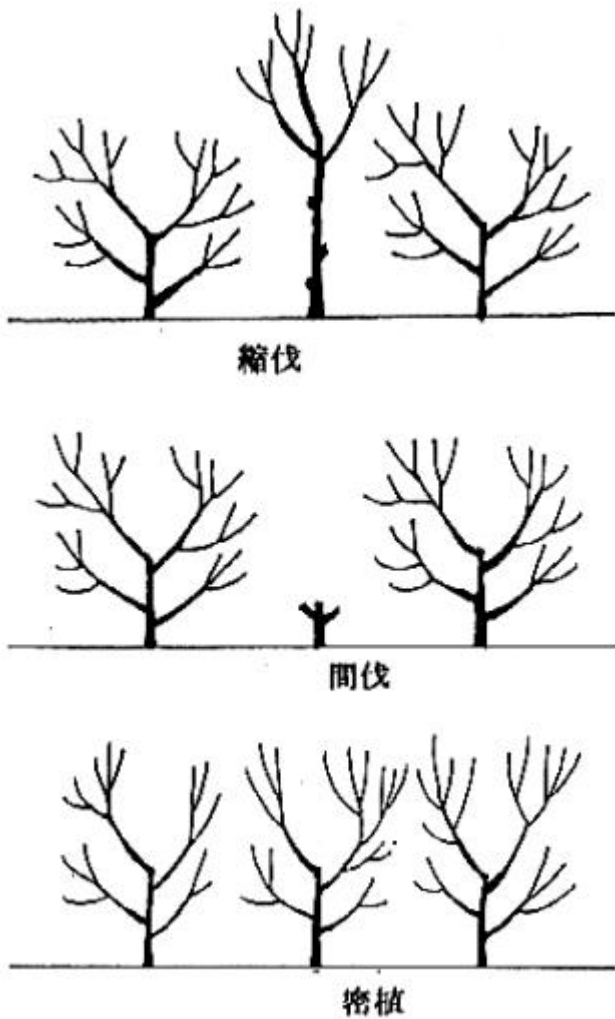


図1 間伐樹の処理方法（試験区）

縮伐区：間伐予定樹の下枝をせん除して樹冠上部のみ残す
 間伐区：間伐樹を伐採する
 密植区：間伐を行わず、当初の植栽間隔を維持する

図2 間伐樹処理方法別の不良果の割合

注) 供試樹 筑波（5年生）
 各区4樹（間伐区は2樹）

表1 間伐樹処理方法別の収量

区	供試本数	収穫総数	全収量		健全果				10a当収量(kg)
			全果数	全果重(kg)	果数	果重(kg)	1果重(g)	健全果率(%)	
縮伐	4	615	1258	25.4	932	18.9	20.3	74.2	454.1
間伐	2	275	620	13.6	446	9.8	22.0	71.9	235.9
密植	4	810	1493	34.0	841	17.6	20.1	56.4	422.6

注1) 品種：筑波 H11年調査

注2) 植栽間隔：3.8m×2.7m 96本/10a